
鮮血の殺戮者

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鮮血の殺戮者

【Nコード】

N7460K

【作者名】

燐

【あらすじ】

世界は無限にある……
だが、その……青年は手に入れてしまった
……神を喰らいまた……世界すら喰える力を
……その青年は力に溺れ荒れ狂い
……世界を喰い始めた
……その‘暴食’は誰にも止められない……相手が‘神’
であつても……

プロローグ（前書き）

作者「ど～～も、作者の憐と言います」

零「この小説の主人公を努める夜天 零だ……」

作者「この小説は最悪のバットエンドそして……」

零「残酷な描写が沢山ある……」

作者「まあ…… かなり酷くする予定だけどまあ…… 何とかなるだろう」

零「駄文だな……」

作者「それを言わないで欲しいな」

零「……死ね」

作者「酷って…… ちよその手に持っている大剣をどうにかしてくれないかな？…… アハハハ……」

零「……熾烈轟殺」

作者「ゴフッ！……バタッ」

零「駄文だが見てくれると嬉しい…… それではな……」

作者「最初の……前書き……で……殺られた……バタッ」

プロローグ

.....
血ガ欲シイ

.....
血ガ欲シイ

.....
我ハ殺戮者

.....
血が足りナイ

.....
喉が乾イタ

.....
イナイノカ？

マタ殺シニイコウ

我ガ欲ヲ満タスタメニ

[illegible]

最初のキャラクター紹介

ヤテン
夜天 零

身長：170

体重：60

年齢：……外形は16歳（実の年齢は100歳を越えている）

武器：終死（大剣）

天終（双剣）

血終冥闇死（刀）

スキル：暴食の魔眼

暴食の魔眼

・全てを食べることができる（それが物質でもなくても）
喰らった物は自分の力となる

容姿：漆黒の髪に血の様な目中性的な顔立ちでかなりの美青年

説明

人を自分の獲物としか見ていない
性格は残酷で人を殺すことに全く躊躇がない
感情を表に出すことは殆どなくいつも無表情
世界を回り沢山の人間の命を喰ってきた
基本的には大剣か双剣で戦うが本気だと刀を使う
趣味は料理を作ること（腕はプロ級）

最初のキャラクター紹介（後書き）

作者「ど～～も、昨日変な夢を見た燐です」

零「……零」

作者「い～～や、夢の中であるゲームのキャラクターが出てきたと思ったらいきなりそのキャラクターが貴方の婚約者とか言ってきたからマジでびびった……」

零「……………」

作者「もうベッドから飛び出してあれは夢だあれは夢だあれは夢だ……と何回言ったのやら……………」

零「……遂にそこまで脳みそが腐ったか……」

作者「Σ酷っ……まあ思ったよ……遂にそこまで逝ってしまったか……て」

零「……案ずるなお前は既に世界から見放されている存在だ精々下らない世界の中で足掻け」

作者「酷い～～～!」

零「五月蠅い……死にたいか？」

作者「すいませんでしたm(_____)m」

ああああああああああああああああああ.....

作者のミンチ完成♪

第一話：暴食者

――ある世界“セレナーデ”そこは魔族、天使、龍族、人間と住んでおりその四つの種族に分けられた国、魔族国“リーディ”、天使国“エンジェル”、龍族国“グラバイツ”そして人間国“エターニア”と別れているその人間国エターニアのある森から物語は始まる

ズズズ……………

ある森の中から空間が開いた、丁度大人一人くらいが出入り出来るくらい……………

???「……………」

その空間の中から少年が出てきたその容姿は漆黒の様な黒い髪そして血のような紅い目をした中性的な顔立ちをした美少年……………彼の名前は夜天 零“鮮血の殺戮者”とゆう異名を持つ

零「……………まずは“獲物”の場所を探すか……………」

零はそう呟くと歩きだした……………彼にとっての“獲物”とは？

10分後……………

零「……………」

カサガサ……

近くの草むらが無造作に動きそこから出てきたのは三人の男……………

男1「兄ちゃん……………ここは俺達盗賊“カオス”の縄張りだこれ以上進みたかったら金目のものを寄越せ」

背に大剣を背負ったデブな男が零を指差しながら言った

男3「早く渡さないと親ビンがお前を殺すぜ」

更に続けて背に刀を背負った男が零を脅すように言った

零「……………邪魔」

それを零は冷めた声で言い返した

男3「ああん！？お前殺されたいか！？」

零「もう一度言う……………邪魔だ屑」

男3「貴様……！！！」

男3は零に切りかかったが零はそれを軽く避ける

男2「死ねえ！」

バン！バン！

男は腰から銃を抜き取り零を目掛けて撃ったがこれとも簡単に避けられた

男1「残念だな……………俺達に喧嘩を売ったのが運のつ（ガシッ！）」

零は瞬時に移動し男1の顔を掴んだ

男1「なっ！？」

零「……………」

グシャ……………

男1「ギヤアアアアアアアアア！！！！！」

そのまま男1は顔を潰され男1の顔は両面、鼻をもぎ取られ口は耳の近くまで裂けていた

零「五月蠅い……………」

ガシッ…………ゴキッ……

零は余った手で男1の首を潰し千切り取り男2と男3の近くに軽く投げた

男2 & amp・男3「ひっ!？」

男2、男3は千切れた男1の頭を見て恐怖に包まれた……………自分達も殺されると……

男3「につ、逃げ（五天死裂）」

ザシユザシユザシユザシユ!

零は己の武器の一つ天終を持ち男3の両手、両足、首とバラバラに切り裂いた

男2「ひiiiiiiii!？」

男2はあまりの恐怖に零に背中を向け走って逃げようとするが……

零「魔殺双刃」

零は双剣をクロスに重ねて降るとX字の斬撃が飛び男2を切り裂いた

零「……………」

零は足元に転がっていた男3の手を取り……………

ガブリ……………

喰った……………

零「……………不味い……………やはり……………こんな腐った人間は不味い……………」

そう呟くと手に持っていた男3の手をどこかに放り投げた

零「さあ……………俺の“獲物”はドコダ？」

零は歩き出した全ては自分の欲望
“ 暴食 ” を満たす為に……

第一話：暴食者（後書き）

作者「うわゝゝ酷いな……」

零「そして早く終わり過ぎだ……」

作者「まあ……いいや次回“出会い”」

作者「おたのしみに！」

第二話：出会い

零「……………ここか」

零は盗賊を殺した後念のためにと消却処分（食べた）した後少し歩き人間都市“テリア”に到着した

零「栄えているな……………この町は」

……………楽しみだここが灼熱の業火に焼かれ人間どもが泣き喚き、苦しみながら死んでいくのが……………ククク

零「まずは……………宿屋を探して一泊休もう」

因みにお金は盗賊から奪った

しばらく歩くと金髪のツインテールをした少女が二人の男にナンパされている所を目撃した

少女「辞めてください！」

男1「ゲヘヘヘ…俺はお前みたい女は好きだぜ」

男2「そうだぜ……俺達と気持ちいいことをしようぜ……ゲヘヘヘ」

零「……………」

零は辺りを見渡すが誰一人助けようとせずただ通りすぎているだけだった

零「……………」

まあ……この反応が普通だろ誰だってこんなことにまきぞわれたくないからな……さてどうするか…うん？

零の目の先にはツインテールの少女の友達だろう紅い髪をした少女が男1を近付いていった

少女「アリサから離れなさい！」

男1「あつ？」

零「（ほお……中々の魔力だな）」

どうやら金髪の少女の名前はアリサと言っらしい

少女「ユーリちゃん！」

紅い髪をした少女は男1と男2を睨め付けた

男1「ユーリ？……ちっ！…テメエ“炎髪の修羅姫”ユーリ・プラ

ゼントか!？」

ユーリ「それがどうした？」

さあ私の友達を返して貰おう……今ならなにもしない」

男2「ちっ……兄貴どうします?。」

男1「ふっ……何、こうしたらいいことだ……!」

男1は腰から素早くナイフを引き抜くとアリサの首に突きつけた

ユーリ「!」

男1「おっと……炎髪の修羅姫それ以上近付いたらお友達が傷つくぜ」

ユーリ「くっ……ゲスが!」

男2「ククク……流石兄貴!」

零「（もう見てられんな……）おい……」

男1「あああん!？」

零「その子が嫌がつている……だからその腐った手を離せゴミ虫」

男2「誰がゴミ虫だ!」

零「お前達だ耳まで腐っているのか?ゴミ虫」

男1「テメエ……言わしておけば………」

零「所詮、人質がないとなにもできない奴……『ミ虫呼ばわりして何が悪い？』」

男1「はっ……言わせておけば……この子がどうなってもいいのか！？」

零「いいぞ」

男1 2 & a m p ユーリ「なっ！？」

零「何てな」

シュツ……

男1「何！？」

零は一瞬で男1に近付きナイフを叩き落とした

零「フン！」

そのまま左手で男1の腹を殴り飛ばした

男2「兄貴！貴様……！！」

暁の閃光よ

我、手に宿りて

槍とかせ

フレイムランス！」

男2は零に向かって炎の槍を投げた

零「ふっ……武装召喚、終死」

零が呟くと闇が零の手に集まり黒い大剣となった

ブン！

そのまま零は片手で終死でフレイムランスを剣圧で吹き飛ばした

男2「なっ！？」

零「（こんな町中で殺すと後が面倒から……）光魔閃」

零が大剣を降ると黒い閃光が男2を吹き飛ばした

男2「ガハッ！？」

男2は壁に叩き付けられそのまま気絶した

男1「お前……！！」

男1は零に襲い掛かろうとしたが首筋紅い太刀を突きつけられ動きを止めた

ユーリ「私を忘れてもらっては困るな」

男1「くっ……」

零「（あのユーリとか言う女やるな……）」

アリサ「あつ…あの、助けていただきありがとうございました」

その後、その場を立ち去ろうとしたが案の定なのかアリサとユーリに捕まった

本人達は助けてくれたお礼がしたいとか……

零「……偶然通り過ぎただけだ」

ユーリ「それでも、私の友達を助けてくれたのは変わりない……ありがとう」

零「……………」

こうゆう女は嫌いだ……

アリサ「あつ…あの！」

零「……何だ？」

アリサ「名前を覚えてくれませんか？」

零「……人に名乗るならまず自分から名乗ったらどうだ？」

アリサ「あっ……！」

失礼しました私の名前はアリサ・セラフィスといいます」

ユーリ「ユーリ・プラゼントだよろしく頼む」

零「……夜天 零だ」

アリサ「よろしくお願いしますヤテンさん」

ユーリ「よろしく頼むぞ夜天殿」

零「……ああ（これはこれはで面倒なことに巻き込まれたな）」

第二話：出会い（後書き）

作者「短いな〜」

ユーリ「ふむ……作者よいじけることない人間は失敗を重ね成長していくんだ」

作者「うわ〜マジでその言葉心に染みるよ〜」

アリサ「あっ…あのヤテンさんは？」

作者「うん？零は今回は出ないよ次は出るけど」

アリサ「そっ…そうなんですか」（ショボーン）

ユーリ「おい作者……ゴニョゴニョ」

作者「何だユーリ……ゴニョゴニョ」

ユーリ「フラグはもう立てらすのか？……ゴニョゴニョ」

作者「予定では次で立てらす予定だ因みにお前も立つぞ……ゴニョゴニョ」

ユーリ「なっ!？」

アリサ「ええええ!？」

作者「予定ではアリサ、ユーリ後一人か二人ぐらい追加する予定」

ユーリ「ハーレムではないか」

アリサ「むづううう！」

作者「えつと……若干一名嫉妬しているけど……まあいいや次回第三話：『説明と好意……そして夜天空』」

アリサ&ユーリ「よろしくね（頼む）」

第三話：説明と好意……そして…夜天 空（前書き）

作者「すいません！すつごく遅れました！」

零「前置きいいから早く始めろ」

作者「あっ……はい！ではどうぞ！」

第三話：説明と好意……そして…夜天空

あれから暫くアリサとユーリ雑談してお開きになった……途中でめんどくさくなり本気で殺そうかと考えたがあんなにニコニコしながら質問されると逆に斬る気が失せる……

アリサ達に聞いたがここには“ギルド”とゆうものがあるらしい人、悪魔、竜、天使から魔獣を守るために出来た組織らしいランクとゆうものがありCから始まりSSSとまだ誰もなっていないランクZXとゆうものがあるらしいSクラスになると二つの名が付けられるユーリの場合炎髪で刀を使い修羅の如く戦うことから“炎髪の修羅姫”とゆう二つの名が付けられた

ユーリはオスティア学園の中で唯一のSクラスらしいアリサはAクラスらしい

とりあえず俺はギルドと言うところに行き魔獣を刈ることにした正直な話……そのそこら辺の人間を喰らうより魔獣の方が喰いごたえありそうだからな……魔獣については下級魔獣、中級魔獣、上級魔獣……そして神級魔獣……楽しみだこの俺の暴食の魔眼を止メラレルカナ？

ユーリ「ギルドに行きたい?」

零「ああ……案内してくれないか?」

ユーリ「ふむ……分かった案内しよう、アリサちょっとギルドに行く方がいいか?」

アリサ「うん? いいよ」

アリサ「ここがギルドだよ」

アリサ達の目の前には巨大な白いビルが立っていた

ユーリ「ここでは色々な依頼が来る。魔獣退治や護衛任務など困っている人達を助ける正義の組織だ」

零「なるほどな」(正義の組織……ふん下らない)

アリサ「どうすゝいところでしょ?」

ユーリ「因みにここにはかの有名な七帝の一人風帝のクライス・ライトニングが居る」

零「七帝？」

ユーリ「ああ……七帝とは極限にまで属性を極めた人の二つの名で炎帝・水帝・風帝・土帝・闇帝・光帝そして全てをまとめる神帝と分かれているのだが神帝はおらず一応七帝の中で一番強い光帝が神帝の代わりをしている」

アリサ「一人一人が一騎当千出来る位強いんだって」

ユーリ「私の目標は炎帝になることだ」

零「成る程な……それじゃあな」

アリサ「うん」

ユーリ「また、会うことを楽しみに待っているぞ」

ここは嘘でも笑った方がいいか……

ニコッ……

アリサ& amp;ユーリ「Σ!……// // //」

アリサとユーリが顔を真っ赤にしたが……どうしたんだろうか？
まあいい七帝か……ククク……どのくらい強いのだろうか？

アリサ「ユーリちゃん……！」

ユーリ「なっ…何だ？」

アリサ「私……レイ君に恋しちゃったかも……」

ユーリ「……そうか」

アリサ「もしかしてユーリちゃんも？」

ユーリ「わっ私は！」

アリサ「ふふふ……ユーリちゃん負けないよ！」

ユーリ「うっうっうっ……」

零がギルドに入ったあとこんな会話があったとかなかったとか……

「……遂にこの世界に……鮮血の殺戮者が舞い降りてしまったか……」

「……何も無い真っ白なある空間の中」

「……一応この世界“セレナーデ”には監視目的で来たんだけどな……」

その空間に一人白いコートを被った人物が何処かを見ていた

「……イクス……居る？」

イクス？「はい……ここに」

真っ白な空間の中に突如執事服を着た“イクス”と呼ばれる人物が現れた

「……夜天 零……君の暴食はこの世界で終わらせる……」

何処か力強く手を天に向けて憎しみも無く……悲しみも無く……本の少しだけ嬉しそうに手を握った

イクス？「……様……」

「……君と俺はよく似ている」

まるで歌うように……………唱えた

???「君も自らの力に溺れ……………」

何も感情も残っていない声で…………

???「自ら死に場所を求めた愚かな道……………」

目を閉じ何かを思い出すように…………

???「大丈夫……………バットエンドは俺が破壊する」

少し強めに呟き……………既に未来永劫を知っているように

???「俺は君を“零”にする……………」

零……………それはゼロを表す意味

???「世界神の一角……………破壊神“夜天 空”」

君の暴食は破壊されもう一度零に戻り夜天はでは無く……………光ある道
へ君を助け出す君と俺は同類……………だから君を助けるよ……………でも、
それでも与えられた光の手を拒絶するのなら……………君は

俺が.....

..... 殺力ナキヤイケナイ.....

..... さあ..... 君は光と闇、希望と絶望、ハッピーエンドとバ
ッドエンド、どちらを選ぶかな？

第三話：説明と好意……そして…夜天 空（後書き）

作者「新キャラ登場！」

作者「そしてこの小説の危機！」

作者「何故ならこのバットエンドにちゃん行くか不安になってきたからだ！」

空「ちゃんとまあハッピーエンドにはするきは無いけどね〜」

作者「まあ……そうですがそれより（。A）さん感想を頂きありがとうございます！」

零「まさかこの腐った脳の持ち主の作者が書いた小説に感想を書かれるとわな……しかも急いで感想を書いたら名前を間違えると言う大失態を犯すなんて」

作者「うう……ホント嬉しかったです。後……本当（。A）さんすいません……感想の時名前を間違ってしまい申し訳ありません」

アリサ「そうだねでも何かやる気が湧いてきたね作者さん……ちゃんと反省しないとね」

作者「全くそのとおり！これから二日に一話と言うペースでやってやる！」

ユーリ「三日坊主になる確率が大だか……頑張れ」

作者「うし！では次回四話『夜天と夜天の出会い』お頼みしにね♪」

第四話：夜天と夜天の出会い（前書き）

作者「完成！では駄目文ですがどうぞ！」

???「さて……ドンナ味ナノカナ？」

その少年の目が紅く不気味に輝くと少年の足下に影の用な“何か”が広がったその“何か”はガイアドラゴンに近付いていった……

ドラゴン「~~~~~!？」

口を塞がれ逃げることも反撃することも許されなくなった無様なガイアドラゴン……

???「さあ……お前の力……頂くぞ」

その言葉と同時に“何か”の影はパツクリと開きそこには綺麗に並べられた歯があつた

ドラゴン「~~~~~!？」

断末魔の様な叫び……その“何か”の影はその断末魔を嘲笑うように歯と言つなの牙を向けドラゴンを削り喰い始めた。

骨や筋肉、血、内蔵、脳など削りながら何も無くさず正に息を引き取る間際の苦しみ……断末魔を叫びながら絶命していった……

……ガイアドラゴンが最後に見たのは狂気の笑顔を作り此方を見る

……鮮血の殺戮者『夜天 零』だった。

.....チャンチャン

ある森の中、小鳥の囀ずりが森の中に広がる.....その一角で木にもたれ静かに眠る零がいた

零「.....ん」

温かい日光と優しい風が零の頬を撫で小さく寝返った後.....零は目を覚ました

零「ふう.....行くか」

溜め息を付き昨日訪れた町“テリア”に向け歩き出した

くテリアく

零「.....」

ガヤガヤ.....

まだ太陽は出たばかり言うのにテリアの市場は賑やかだった

零「……………!？」

その中を歩いていた零は突如背中に寒気を感じ自分の武器の一つ双剣“天終”に手をかけた

零「……………」

辺りを見合わすと零は一軒家に目を向けた。一軒家の屋根には体全体を隠すように白いコートを着た謎の人物がコートの中から零を見ていた

零「……………」

????「……………くすっ」

謎の人物は小さく笑いと虚空へと一瞬で消えた

零「……………ふっ」零も少しだけ笑うと少しだけ呟くと一瞬で消えた……………零は見たのだあの白いコートを着た人物が小さくこつ口を開いたことを……………

“鮮血の殺戮者……付いて来て”と

??? side

……遂に見つけた……“鮮血の殺戮者”

うん、ラーズに聞いたとおり本当に昔の俺みたいだな……

本当は世界神として神羅天木に抹殺命令が出ているんだけど……俺は嫌だな

???「まあ……どれほどの実力が見極めてもらうよ？同じ夜天を名乗る者よ……」

謎の人物は少しだけ零に向かって殺気を出した達人レベルでも分からないほどだったが零は直ぐに反応し自分の武器に手をかけた

???「……………くすっ」

その反応を見て謎の人物は小さく微笑んだ

???「鮮血の殺戮者……付いて来て」

君の力は人間がもつのに強すぎる……そして君は人間では無くな
ってしまった……ねえ聞こえる？“本当”の君は？俺は正義の味
方でも悪者でもない“破壊神”だけど……君を助けるため……
君の狂気と暴食の魔眼を破壊して君を絶対に助けるよ……だって
君と俺は“友達”なんだもんねえ？“紫乃崎 紅”君……

第四話：夜天と夜天の出会い（後書き）

作者「新たな新キャラ（。。。）キター！！」

空「新キャラと言っより名前だけどね」

零「……………」

作者「ふふ……………さてとこれが終わったら二次創作にレッツダゴーだ！」

ユーリ「この小説は何話ぐらいで終わる予定なんだ？」

作者「代々10〜20話ぐらいの間かな？」

アリサ「短いんですね……………」

作者「正直早くしないと自分のやる気が無くなるからパツパと終わらしたいんだよね〜」

零「所詮脳無し作者だから期待しても無駄だろう……………」

作者「相変わらず酷いな〜まあいいや次回『死闘！……………そして暴かれた真実』次回も宜しくね！」

アリサ「ねえユーリちゃん私達の出番は何時なのかな……」

ユーリ「……分かん」

イクス「そうですね……私はまだ一言しか喋っていませんし」

アリサ& a m p ユーリ「……誰ですか？（だ？）」「」

イクス「……orz」

.....ガクッ

本日6/23日午後23:46。×番地で無惨に斬死した。×さん
は.....ピーーーー（長いしめんどいので以下略）

第五話：死闘！……そして暴かれた真実

太陽が丁度天空の中心に昇っていた昼頃の時零と謎の人物は町から20kmほど離れた場所にいた

「……付いて来たね……」

零「ふっ……貴様は俺の二つの名を知っていると云うことは別世界から来た奴か？」

零は内心謎の人物は他の世界から来た自分にたいしての復讐者だと思っていた

「……そうだね……まず俺の名前は“夜天 空”」

そう言い空はコートの顔を隠していた部分を脱いだ

零「……ほう」

そこには金髪、銀眼で誰もが見惚れてしまうほど可憐な顔立ちをした美少女？がいた

零「……女か」

空「残念だけど……俺は男だよ？」

零「……」

空「何？その「何言っただこいつ」みたいな顔」

「いや……いいい」

空「あっそ、取りあえず単刀直入に言わせてもらっけど……」

紫乃崎 紅”を還して”

零「……………」
クククク」

空「ねえ？知っているんでしょ？」
“夜天零”

殺気を込め零を睨んだ空……その瞳は怒りに燃えていた

[illegible]

空「成る程ね……………じゃやっぱり……………君が紅の妹を」

零「ああそうだ!!! 楽しかったぜ! 絶望に染まり大切な…… 大好

[illegible]

狂いながら天に向かい全てを嘲笑うように笑う零……それは正に悪魔の笑いだった

空「外道が……！」

それを怒りを隠せない様子に空は自身の武器血刀“終夜”に手をかけた

[illegible]

零は虚空へと手を向けると光を飲み込むような闇が集まりそれは光ですら切り裂くような一本の刀へと変わった

空「……世界神の一角破壊神……夜天 空………参る!!!!」

[illegible]

零「終末の獄炎！罪人は罪に地獄には深淵を下す煉獄の炎！

――エンシェントアビス！」

空が刀を振ると光すら焼き尽くすような漆黒の炎が出て火と風の嵐を一瞬で飲み込みそのまま零に向かって炎は進んだ

零「ナメルナ！獄双天覇！」

零が交互に刀を振ると二つの漆黒の衝撃波が暗黒の炎を吹き飛ばした

零「ン？」

暗黒の炎が消えると空が居た場所には誰も居なかった

零「ドコダ！？」

空「――っ！天落撃襲」

ガキッン！

空「……………ちっ」

零「危ナイナ」

空は魔法を放った後直ぐ様上空にジャンプし奇襲を仕掛けたがギリでできずかれガードされた

零「フン！」

交じりあつた刀通しを零は無理矢理弾き飛ばした

「空……と」

空は空中で一回転し地面に着地した

ガキッ
ン!!!

「……空」

零は瞬時に空に接近し重い一撃を叩き込んだが空も負けじと直ぐ様
防御した

空「紅を還せ！」

零「モシアイツガ再ビ表ニ出レタトシテモ既ニアイツハ所詮壞レタ人形ダ！」

空「貴様がそうしたんだろうが!!!」

零「勘違イシテイルナ……」

空「何!？」

零「アイツハ自ラ墮チタノサ！自ラノカデ復讐スルト……両親ヲ殺

シタアノ狂ツタ殺人者二ナ!!!」

空「例えそうであつたとしても何故雪乃を殺す必要があつた!？」

零「アアソソナノ……殺シタカツタダケダ!!!」

空「つ——！！！！貴様——！！！！」

バキッ！

零「グッ！？」

空は一瞬の隙を突き零の腹に正拳を叩き込んだ

空「お前だけは許さねえ！螺旋神魔槍！！！」

空は莫大な魔力を刀に纏わしてそれを竜巻の様に放った

零「キヤハハハ天地終焉破！！！」

黒きの剣撃と竜巻はぶつかり相殺しあつた

空「永遠に勝利を約束された剣……今こそ運命を切り開け！！！！

「――エターナル・エクスカリバー!!!!!!」

零「全テヲ喰ウ闇！今コソ暴食セヨ！！！」

「――カオス・ベルゼブブ!!!!」

紫電の如く輝く光と闇の暴食の光はぶつかり桁外れの爆音が辺りを一瞬で焦土と化した

空「……………これじゃきりがないか……………」

零「キャハハハハハハ楽シカタガ……………モウアキタソノ力俺ガ貰才ウ！」

空「っ!?!」

バクリッ……………

零の瞳が不気味に光ると空は本能的に飛び上がった
空が地面を見てみると不気味に広がった影と空が居た所は“喰われていた”

空「暴食の魔眼……………!」

零「知ッテイルノカ!……………マア……………イイ……………サア俺ニ喰イ殺サレロ!……………」

不気味に広がった影は一斉に歯と言うなの牙を向け空に襲いかかった
空「……………」

第五話：死闘！……そして暴かれた真実（後書き）

作者「あんな前書きありえる？」

ユーリ「お前が書いたんだろお前が」

作者「だって……この小説は基本的コメディーが全く無いんだからこんな所で笑いを取らないと……」

空「そんな“下らない”こと一々気にしていたら日が落ちるよ」

作者「もう日が落ちていきますから！」（ただいまの時刻23：46分）

零「まだ戦いは続くんだな……クククク」

作者「うつわ！怖つまあ……一様続くよ正直二人ともキャラ崩壊しているけどね」

アリサ「クールな夜天さんが……」

ユーリ「恐ろしいな狂気は……」

イクス「……」（私の出番は？）

作者「さあ？」

イクス「……グラビディ……」

第六話：破壊神降臨！……決着（前書き）

作者「遂に決着！勝つのは空か零か！？そして神化とは？

鮮血の殺戮者！生殺与奪編！第六話：『破壊神降臨！……そして決着』始まります！」

第六話：破壊神降臨！……決着

空「……………」『神化』」

その瞬間空の周りにいた影は吹き飛んだ

零「！？……………」ナンドト！？」

空「さあ……………」お前の鎮魂曲^{レクイエム}を奏でろ！」

空の髪と眼は全て漆黒に染まりありふれた圧倒的な気と魔力は辺りを破壊していった

零「ソレガ……………」貴様ノ力カ……………」

空「ああ……………」破壊神の力……………」その身に刻め！！」

零「ッ！？」

零が瞬時に横に移動した瞬間零の居た場所は爆発した

零「……………」

空「全てを破壊する……………」それが俺の能力だ」

零「チッ！？」

そう呟いた直後零の周囲は爆発し最後に零の居た場所も爆発した

[illegible]

空「っ……!？」

突如零から凄まじい魔力が放たれた空は危険を感じ瞬時に零から離れた

零「夜天　空！！！貴様ハ必ズ次に殺す！！！それまデ首ヲ洗ツて待ツテロ！！！！」

紅蓮・激流・疾風・深淵・聖光・重ナリアイ真ノ力解キ放テ！！！！」

空「!?!ちつ、全ては破壊全ては終焉全ては破滅へと誘え……終末の光!!!!」

零の手には七色の光、空の手には禍々しい魔力が集まっていった

そして……

零「エレメンタル・カタストロフィー！！！！！！」

空「エンド・オブ・ザ・シヴァ！！！！！！」

放たれた虹色の光と終末の光はぶつかり合い辺りを焦土としながら
相殺しあった

相殺しあった地は既に無くその空間ごと破壊され何も無い只の巨大
なクレーターだけが残った

そして……

空「逃がしたか……」

そのクレーターに一人立ち尽くす空

空「……あの傷だと結構再生に時間が掛かると思うけど……イクス？　いるんでしょ？」

ズズズズ
.....

突如空の横から黒い髪をし執事服を来た空の使い魔イクスが姿を現した

イクス「はっ！ここに……」

空「零の搜索と監視を宜しく……俺は予定通りあの学園に行かないといけないから……」

イクス「御意！」

イクスは転移魔法を使い一瞬で姿を消した

「空……」

辺りに静寂が訪れた

空「……何が神だ……友だち一人助けられないで……何が神だ！……くそおおおおおおお！！！！！！！！！！」

空は天に向け吠えたやつと見つけたただ一人の友だちを助けられなかつたことに……只悔しくて自分は弱者だと自分が強ければ……あいつを……紅を助けられることが出来るのにと……只悔しくて

.....

第六話：破壊神降臨！……決着（後書き）

作者「決着ついた」

……

……

……

…

作者「……………虐めだよね？これ集団虐めだよね」

作者「俺が悪かったから（何が悪いかわかんまま）許して〜〜〜」

空「勝ったけど逃がした……」

作者「どんまいけどまだちゃんとしたチャンスがあるから
ガンバッ！」

空「……………他人事だね」

作者「そりゃあ……………他人だから！」↑ヒドッ

空「……………久しぶりにキレた

森羅万象に打ち砕き永遠の闇に沈むがいい……………」

作者「あっあれ？」↑何で怒っているのか理解できないバカと言っ
なのアホ

空「エターナル・カオス！！！！！」

どが~~~~~~~~ん♪

作者「我が人生一生のくいあいいいいい」

イクス「アホな作者に変わり私が次回予告をします今回は『キャラクター紹介2』と言うことで私達の紹介です皆さん楽しみに」

終わり

キャラクター紹介2（前書き）

作者「これはアリサ、ユーリ、空、イクスの紹介です」

キャラクター紹介2

アリサ・セラフィス

身長：157

体重：えつと……それは…… / / /

年齢：16歳

ギルドランク：A

得意属性：光・水・風

容姿：上の中

武器：スタシアー（杖）

金髪のツインテールに茶色の目をしたかわいい美少女

実力はそこそこ強く優等生、回復魔法が一番得意

性格は誰に対しても優しいだがその優しい性格のせいか相手に誤解されることがしばしばある

ユーリ・プラゼント

身長：170

体重：……灰になりたいか？

年齢：16歳

武器：紅烈（剣）

ランク：S

得意属性：炎・闇

容姿：上の中

真紅の髪に真紅の目を持つ中性的な顔立ちの美少女
クラスSで学園では神童と呼ばれ学園でも教師を除けば勝てる生徒
は殆どいない
性格は真面目でいつか炎帝になることを夢見て修行中

夜天 空

身長：168

体重：57

年齢：外形は16歳（実年齢は億を越えている）

武器：血刀・終夜（刀）

容姿：極上

腰まである金髪に銀眼と綺麗な女顔の美少年？（男だが99%の確率で女性と思われる）

町の中を歩けば男性も女性も思わず振り向いてしまうほどの美しい神であり無敵と言うより反則級の強さまず同じ神でも空に勝てる神はいない

基本的には平和主義だが何かと興味を抱くものには徹底的に首を突っ込む

望めば全ては破壊できる能力を持っている

神化……簡単に言えば空の魔力等を全て解放した状態でこの時破壊できる能力は最大に発揮できる。しかし、常に神化していると自分の能力がコントロール不能になるので何時もは自分に封印魔法を掛けている

一応何時でも破壊できる能力は使えるがもしもの場合も含めあまり

使わない

零の秘密を知っている……

イクス

身長：187

体重：65

年齢：外形は20歳（空と同じくらいの年齢らしい）

武器：素手？

容姿：上の上

後ろに少しだけ縛った黒髪に金眼を持つすらりとした体系
空に絶対の忠誠を誓う空の使い魔

闇や影を自由に操ることが出来て影から影へ好きな場所に移動できる
何時もは影の中でじっと出番を待つちよつと悲しい神だが戦闘にな
れば圧倒的な魔力と格闘術で相手を押し伏せる
イクスも零の秘密を知っていて本当は空と協力しようとしたが空に
止められ不服に思いながら監視に付いた

キャラクター紹介2（後書き）

空「チート！最高！」

作者「そりゃ……空に勝てる人種なんて存在しないよ」

アリサ「あの〴〵作者さんこの小説自体私達が二人の夜天君に戦った
ら……」

作者「髪の毛一本も残らないと思うよ主に喰われるか破壊されて…
…」

アリサ「……ガタガタ」

ユーリ「おっ、恐ろしいな……」

作者「そりゃ……零は暴食の魔眼でありとあらゆる人や神を喰らつ
て力を得ているし空は世界神と言って全ての神の頂点に君臨するし
……人間が戦うなんて無駄無駄」

アリサ「……私達ヒロインですね？」

作者「さてと……これからどうしようかな」

アリサ「人の話を聞いてください」

作者「さて次回第七話：『そして……運命の歯車は動き出す……』
宜しくね」

アリサ「作者さ〜ん!!! 私達の戦闘シーンとかどうなるんですか!?! 私達と夜天さん(両方)とはどう関わるんですか!?! そして最初に『ヒロイン死にます』って私達どうなるんですか!?!」

第七話：そして……運命の歯車は……回りだす（前書き）

空「作者はテスト期間で勉強を頑張っています」

イクス「そしてこの小説も今日を最後と、しテスト終了まで更新しません」

アリサ「えっと……テストが終わる日が7月の9日ぐらいになると思います」

ユーリ「それまで更新は出来なくなると思っが作者も今“珍しく”頑張っているので我慢してほしい」

零「と言うより……このバカ作者が作った小説なぞ読んでいる奴なんているのか？」

四人「……………」

空「とっ…………とりあえずスタート！」

この体は俺の物だ！

あんな腰抜けの者じゃねえ……！

俺はまだ喰いありねえ！

この世界……全ての世界を喰らい尽くすまでは……！

零「……………」力だ！」

力、力があれば夜天 空を擦じ伏せる……そしてアイツを喰らえば
更に俺は強くなる……！！

零「手始めに……生物狩りをするか……」

まずはこの世界のありとあらゆるを喰ってやる……

[illegible]

その日……その山にいた全ての魔獣とそして……近くの村に住んでいた人の姿は突然と消えた……残ったものは……何かに削り喰われた様に残った人の“一部”だけだった

そして……影は……セレナーデ最大都市……キングダム……に延びていった

ある世界……

イクス「この間まではこの世界“セレナーデ”は確実に夜天 零……別名“鮮血の殺戮者”によって……喰い尽くされるでしょ……」

私は空様の命令で夜天 零を搜索していましたが……とある山の住んでいる筈の魔獣更にその近くに合った人の村は……夜天 零の手により喰い尽くされました……私は急いで空様に報告しました。

そして……報告が終わった後……空様の命令により世界神の一角……全ての次元を操ることが出来る次元神“クロウ・ラーズディング”様

そしてもう一角全てを創造することが出来る創造神“星輝 聖奈”様更に全ての世界を産み出した始まりと終わりの神“アルゼント・ユグドラシル”様に報告しています

クロウ「……夜天 零本当の名前は紫乃崎 紅、8歳の時に目の前で両親を殺害されそれ以来敵討ちを決意妹……紫乃崎 雪乃と二人三脚で育ちその中で危険度SSSランクの魔眼“暴食の魔眼”を開眼死に物狂いで制御を試みるが……逆に飲み込まれてしまい……紫乃崎 雪乃含め紫乃崎 紅の世界“アルトルナ”に住む全ての生物そして神を捕食し他にも計16の世界を捕食した……か」

聖奈「そして……まだ紫乃崎 紅君が開眼する前に偶然あった空ちやんと意気投合し大親友と呼ばれるほどになった……」

イクス「左様でございます」

アルゼント「……………だ」

三神「？」

アルゼント「流石私の息子だ！！親友を深い闇から解放するため一人立ち向かう……………空よ私はそんなゆうに育ったことに感動した！！」

三神「……………」

もうお分かりと思う人もいると思いますが始まりと終わりの神別名“エンシエント・キング・オブ・ゴッド”アルゼント・ユグドラシル様は……………神が付くほどの親バカ（空限定）なのです

クロウ「……………聖奈また始まったようしょう」

聖奈「（アルパパは空ちゃんのことになると人が変わるもんね……………前だって空の可愛さについて丸1ヶ月話されたことあったけ……………」

クロウ「（途中で寝てしまったら神級魔法を無詠唱で三発ぐらい打ち込まれたこともあったな……………」

イクス「あの……………アルゼント様」

アルゼント「何だ！イクス！？言っておくが空は渡さないぞ！！！」

イクス「いえ……………空様は私の主です決してそんな想いありません」

アルゼント「何！？では空に魅力が無いと言うのか！？」

アルゼントはイクスの服に掴みかかりグラグラ揺らした

イクス「……いつ……いえ……空……様……は……大変……魅力が……
あると………思います」

アルゼント「そうか！そうだろ！？ガッハハハハ！！！！！！」

クロウ「父さん……イクスが泡吹いているよ……」

アルゼント「おっ……おとすまん」

イクス「……………」

聖奈「返事が無い只の屍の「まだ死んでいません！」………うん、分かってたよ」

やはりアルゼント様と喋るのは疲れます（汗）

イクス「ごっごほん！さて………本題に移りますが夜天 零並びに紫乃崎 紅の判決を……」

アルゼント「むっ………そうであつたな………クロウ、聖奈どう思う？」

クロウ「僕自信の考えだと空の能力を使い夜天 零と暴食の魔眼だけを破壊するのが一番の選択だと思います」

聖奈「私もそれが運命だとしても暴食の魔眼を持ってしまい自分の

世界を……殺してしまつても……空ちゃんの様にちゃんと力の使いをマスターすればきっと世界のためになつてくれると思うよ」

アルゼント「決まりだな……イクス、空に伝えろ『全力全開で自分の信念を貫け父はその背中を何時でも見ていると』……」

イクス「はっ！」

さて……私は我が主にアルゼント様の言葉を届けなければ……

イクス「と言うことです」

空「うん……あの人らしいや『全力全開で自分の信念を貫け父はその背中を何時でも見ていると』……か」

イクス「空様……」

空「父さん……ありがとう……イクス」

イクス「はい……！」

空「俺は近々多分零ともう一番殺り合うだろう……その時俺がどん

なになっても決して手を出さないでくれ」

イクス「分かりました」

空「さて……行こう」

あいつの性格上多分一番人工が溢れて一番強そうなのがいそうな場所……キングダムか……

空「夜天 零……俺は諦めないよ」

だって……助けたいんだもんあの時あの場所で……話しかけてもらわなかったら……俺は……何か大切な物を破壊してしまいそうだったから

ああ……

今宵は満月か……

目障りな程

綺麗だな……

くテリアく

アリサ「ユーリちゃんこの依頼はこれで終り？」

ユーリ「ん？ああこれで課題は終了したな」

アリサ「それじゃあ…キングダムに帰るの？」

ユーリ「ああ……早く帰って父や母に新魔法を覚えてくれる予定なんだ」

アリサ「そうなんだ！ユーリちゃんの夢は炎帝になることだったことだったね」

ユーリ「ああ……炎帝になることが私の夢だ」

アリサ「頑張つて！ユーリちゃんなら絶対なれるよ」

ユーリ「ありがとう…アリサ」

アリサ「うん！」

ユーリ「さて！明日は目一杯遊んで故郷キングダムに帰るか」

動き出した歯車はゆっくり回り少しずつその早さを上げていく……
その歯車はもう誰にも止められない……………

零「……此方に旨そう魔力が匂ってくるな……確か……この先は……
……ククク、そうかさあ……行こうか」

空「君の思い通りにはさせないよ……夜天 零」

アリサ「行こうユーリちゃん!」

ユーリ「ああ!」

四人「キングダムへ!!!」

この世界は鮮血の殺戮者によって喰われるか……破壊神によって救われるのか……それは誰にも分からない……ただ言えるのは破壊神は自分を信じそして……

自分を助けてくれた親友を信じている……

第七話：そして……運命の歯車は……回りだす（後書き）

作者「今回特に書くことは無い！」

空「何かクライマックスに近付いているね……」

作者「そうなんだよね〜正直この小説10話位で終わりそう……
と言っより終わる」

零「……………早くないか？」

作者「済ません……もうネタが無いんです」

零「やはり貴様はその程度か……」

作者「うっ……どうせ俺なんてこんな下手な小説しか書けないよ
……グスン」

イクス「次回予告はあるのでしょうか？」

作者「すみませんまだ何にも考えていません」

五人「……………」

作者「……………（泣）」

五人「はあ〜」

作者「どうせ……俺なんて……」

アリサ「……わあああ（汗）作者さんその紐をどうするんですか！？」

作者「ん？新世界に旅立つためのアイテムだよ」

ユーリ「まあまあ少し落ち着け……」

作者「……もう嫌だ〜人生なんて〜！！！」

零「ほつとけ時期に勝手に立ち直る」

空「うん、それに関しては同感だと思う」

女性二人「そっ…そう？」

男性二人「うん（ああ）」

イクス「それでは皆さんそろそろ……」

ユーリ&零「ああ……」

アリサ&空「うん」

五人「次回お楽しみに〜」

作者「……………」この落ちなに？」

第八話：キングダムへ……そして暴食（前書き）

作者「凄いぐらい……駄文ですかよろしく願います……はあれが終わったら何のアニメと混ぜようかな」

第八話：キングダムへ……そして暴食

月夜の夜……空も大地も暗黒に染まった世界……その中で何かおぞましい音がした

グチャグチャ

ゴリゴリ

ペチャクチャ

ゴキッベキッグチャ

.....

.....

.....

...

暗黒に染まった大地には“何か”の一部が残っていた
そして……一人の……その身に狂気……その言葉では表現できない
人の形をした悪魔が立っていた……

零「……………」

彼は何を考えているのだろうか？

零「…………… 八八」

咎人は進む…… 罪人は進む…… 殺戮者は進む…… 夜天 零は進む只
々自らの暴食を満たすために世界を暴食するそれが今の夜天 零……
… 否 “鮮血の殺戮者 夜天 零” と言う存在理由のために

…… この体は…… 俺の物だ…… !

…… 誰にも…… 渡さねえ…… !

…… 夜天 空…… お前を喰ってやる!

…… 全ての内臓引きずり出して喰って体は五体…… いや間接部分を
全て丁寧に切り裂いてやる…… 目を抉り出して潰してやる…… 頭蓋

骨叩き割って脳髓までグチャグチャにして飲んでやる……その後は
暴食の魔眼で体の一部一部丁寧に喰ってやるお前に絶望を叩き込み
ながら……！！

それは既に狂気を越えた正に“凶気”だっ

雲一つ無い晴天の空の下……何もない平地を何かを噛み締める用
な足取りで歩く少年がいた

空「いい……天気だな」

彼……夜天 空は今昔のことを思い出していた

空「確か……こんな青空の下で紅に出会っていったっけ」

それは……数百年前のあの日……

空「確か……アイツはあの時……雪乃に振り回されていたんだっけ……」

紫乃崎 紅の只一人だけの妹、紫乃崎 雪乃彼女はとても活発的で興味心旺盛な太陽の用に明るい女性であった

空「……そう……俺がまた不安定になった時だっけ……」

破壊神……と言っても彼は心が少し弱かった

空「あの時は……自分を少し見失っていたっけ……」

世界神の一角破壊神夜天 空……彼の主な仕事は世界の監視や調査……世界の破壊などを仕事をしていた

空「世界は……無限にある」

全ての世界には“人間”と言うシステムがある人間は時にはお互い助け合ったり

お互い喧嘩したり

お互い協力しあったり

お互い愛し合ったり

……と様々な想いをもつ生き物

だが……全ての人間が全て助け合ったり、協力しあったりは……それは無かった

元々人間と言うシステム自体不完全なのだから……お互い憎みあったり

お互い拒絶したり

お互い……殺し合ったり

最終的には兵器……と呼ばれる人を殺すための道具を使い

自らの利益の為、自らの欲望の為、自らの保身の為、自分勝手な都合のいい正義を掲げる奴……等々色々な人物がいる……だがそんな人間だがお互い分かり合える……そして時にはぶつかり合ったり時には助け合ったり……何だかんだ平和の世界もある……しかしそんな世界が100%で出ない人間は不完全なのだから。

世界によつては次元を越え他の世界を我が物にしようとする邪道な行いをする世界もある

空の主な仕事はそれらの邪道な行いをする世界を零にすること……その世界を破壊し一から作り直すと言うこと……だがこれは“作り直す”と言う言葉を借りた殺人行為だ

空、嫌……破壊神は只突如現れ世界を破壊する……只の一方的な殺人行為でしかないのだ……しかし自分の勝手な意思では空は世界を破壊しない空は家族（クロウ達に）に相談したりしてその世界を破壊するか破壊しないか決めているのだ……だが、それは所詮言い訳だ……どんな理由にせよその世界がどんな悪でも結局は破壊したことに変わり無いのだ……そんな仕事だからこそ空は殺らなければならぬ例えそれが……産まれたばかりの子共でも……そんなことを何回か繰り返すと空は少し不安定になってしまふ……本来世界神である彼はそんなことを考える必要は無いのだが……空は元々神ではない……自らの欲望……世界が欲しいと願うその欲望を叶えるためありとあらゆる分野にて最強な人の細胞、世界すら破壊すると言われるモンスターの細胞、挙げ句の果ては神の力を奪い作られた存在……人造神通称：マンメイド・ゴッドと名付けられた人を越え神すら越えるてされる史上最強の……“化け物”とされる存在だった

当時、空は感情さえ無かったいや作られていなかった究極の殺人兵器……その真髄は感情を消し去ること人を殺すと言う概念を断ち切

ることだった

作った人物は空を使い自らの欲望を全て果たした気分一つでその世界を変えたりしていた

だがそんな人物も所詮は人間……空は任務を遂行していくにつれ確実に感情が生まれ始めた

作った人物は焦った『もし……自分を裏切って自分を殺しに来たら？』作った人物は勝手な被害妄想を作り空を……封印した

だが空本人は感情が生まれようと只貴方の傍に居たかった……だけだった

空は絶望をした一番信じていた人物に捨てられたのだ感情が生まれまだ不安定だった空は全てに絶望したそしてこんな感情が空から溢れだした……『こんな世界……滅んじやえ』と

言葉の通り空は自らの力で自らの一番信頼していた人物を殺め更に目に写る全てを只破壊し始めた

その破壊は空の世界他の世界でさえ巻き込み始めたそれを見た世界の監視役次元神『クロウ・ラーズディング』は大急ぎで自らの父終わりと始まりを司り全ての世界の頂点に君臨する神、終始神『アルゼント・ユグドラシル』に報告しもう一人の世界神全てを創造出来る創造神『星輝 聖奈』と三神が協力し空を死闘の末止めた

当時破壊神も居たのだが自らの力に溺れ自分勝手な理由で世界を破壊しアルゼントに破壊神の力を抜かれ人間と同じ生活をさせられたその為次の破壊神をどうしようかと悩んでいたところ

空はさまざまな人間やモンスター、神の力を持つてその組み合わせが偶々良いのか悪いのか破壊の力に向いていたため三神は話し合い空を……処分するのではなく次期破壊神として育てるようになった……そんな過去もあり空は普通の神より凄く人間らしい考え方をしているためたまに思い付いてしまうのだ

破壊神は……ただ破壊しか生まないだが空は人間が喜ぶ顔が好きだっただから空は思い付いて不安定になると決まって“まだ”平和な世界へ行き息抜きをよくする

そんな中で空は紅と出会い意気投合し親友と呼ばれる程仲良くなつた……今は……そんな仲ではないが……

空「……………」

彼は望む……

友を助けると……

彼は望む……

友を闇から救うと……

彼は望む……

紫乃崎 紅を助け……夜天 零を殺すと……

夜天 空の最後の切り札にして破壊神の証……デストロイアを終極
神化を使っても……

空「俺はお前を殺す……」

世界神の一角……破壊神『夜天 空』の名に賭けて

零「あしが……キングダム」

空「あれが始まりと終わり都キングダム」

二人は……戦う……殺し合う運命にある片方は闇……自らの欲望を
満たすため……片方は光……友を救うため……

果たして……運命は光と闇……どちらに向かうのか……それは
誰にも分からない……

第八話：キングダムへ……そして暴食（後書き）

作者「終わった……」

イクス「見ているほう人が疲れそうな文ですね……」

作者「……………今日は特に書くこと無いから次回予告だけして終わりします……………第九話『決戦……………殺戮者と破壊神……………』どうぞ……………」

作者「今日は特に眠い……………と言うことでお休み……………」（眠）「

第九話・決戦……殺戮者と破壊神……（前書き）

作者「大変遅れました……色々と急がしかったので……今回は結構長めです……ではどうぞ！」

第九話：決戦……殺戮者と破壊神……

雲一つ無い晴天の青空……そして八角形の壁に覆われた巨大な都市
『キングダム』……今日もそこは平和の筈だった……

グチャグチャ……

ペチャグチャ……

ゴッくん……

ククク……

ここはギルド『天の守護神』……セレナーデを全体を守るために設立したギルド……今日は一年に一回の大事な会議を行う筈だった……

…それが……

???「くっ……化け物め！」

彼の名前はクライリ・ミーティア……天の守護神第一隊長光帝……セレナーデの中でも最強と呼ばれている

彼は今日会議の為出席した……そして何時ものように会議を進めていたとき……彼が乱入してきた

彼は乱入してきたことにより私達は彼を押さえ込もうとしたが……彼の謎の黒い影により私以外全員……“削り喰われた”……私は瞬時に回避したが左手を喰われてしまった

クライリ「貴様……何が目的だ!？」

零「……………」

クライリ「答えろ!私の仲間達を……何故こんなことを!？」

零「ククク……答えてやろうか……」

クライリ「!？」

彼と初めて目があつた彼の眼光はナイフの様に尖っていた
そして……私は恐怖した体の全細胞が訴える逃げる“あれ”には勝てないと

零「ククク……こんなことをした理由を教えてやろう……只殺シタ
カッタダケダ」

クライリ「……なっ……なん……だと?」

只殺したかった？だけで私の仲間達を殺した？

クライリ「……きつ……貴様ああああ！！！！！！」

クライリは怒りに身を任せ空に斬りかかった

ガキンッ！！

零「ククク……」

それを零は終死で防いだ

クライリ「！？」

零「ハッ！」

零はクライリを弾き飛ばしたクライリは壁に強く叩きつけられた

クライリ「ぐっ……」

零「キャハハハハハハハハハハ……喰ラエ暴食！」

零から再び影が現れクライリを喰らおうとその口を開けた

クライリ「ハッハッハッ……神聖の光は全てを照す光！邪ありし者に正義の裁きを下す槍となれ！！」

零「ククク……？」

光輝く神聖の光がクライリの手に集まり一本の神々しい槍となった

クライリ「ホーリー・ファイズ・ブリューナク……！」

光輝く神聖の槍をクライリは零に向けて放った

零「フッ……」

零は影を使い槍を喰らおうとしたが……

零「！？」

グサッ！！グサッ！！グサッ！！グサッ！！グサッ！！

喰らおうとした瞬間神々しい槍は五つに分裂しそのまま加速をつけ一気に零の体を貫いた

零「ゴホッ……」

零は口から吐血し倒れた

クライリ「……やつ……やったか？」

クライリはよろよろと立ち上がり周辺を見渡した……そこには人々を魔獣から助けるため……協力しあいこの天の守護神を立ち上げた仲間達の亡骸……

クライリ「俺達が立ち上げた……正義が……俺達の誇りが……」

クライリはふらつきながらもう息を引き取った仲間達の亡骸に歩い

ていった

――人間ニシテハナカナカヤルジャナイカ……

クライリ「!？」

声が聞こえてた方に振り向くとそこには光の槍をその身に突き刺さったまま立ち上がった零がいた

クライリ「何故生きている！？確かに急所を確実に貫いた筈！？」

零「キャハハハ……確力二俺ガ人間ト同ジ体ダッタラ确实ニ死ンデイタゼ……」

ナイフの様に尖った眼光でクライリを見つめる零……

零「ソウダナ……貴様ハ特別ニ“アレ”ヲ使ッテ殺シテヤルヨ」

……ベルゼバブ・オルガを使つてな……

クライリ「！」

零の回り凄まじい禍々しい魔力が竜巻の様に集まっていた

零「キャハハハハハハハハハハハハハハハハ……見ヨコレガ
暴食ノ魔眼ノ最終形態！『ベルゼバブ・オルガ』ダ！」

零の回り集まった禍々しい魔力は完全に零を包んだ……

クライリ「くっ！？」

クライリは“何か”を感じ無詠唱で光の防御魔法『ライト・ディフ
ェクト』を使った

その頃………

アリサ「ん〜っおいしい」

ユーリ「確かに美味しいな」

アリサとユーリはとある公園でベンチに座りアイスクリームを食べていた

アリサ「ユーリちゃんこれからどうする？」

ユーリ「ん？そうだな……ギルドに行つてこようと思つ」

アリサ「ギルドに？また何かクエストをするの？」

ユーリ「簡単に出来そうなクエストだけだな……」

アリサ「ユーリちゃんは本当に努力家だね……」

ユーリ「そつ……そんなことは無いぞ／＼」

アリサの発言にユーリは頬を紅くし照れていた

アリサ「フフ……ユーリちゃん可愛い」

ユーリ「かつ……からかうな／＼」

そんな一時を過ごしていた

そしてその公園に夜天 空の姿もあつた

空「…イクスまだかな……？」

彼夜天 空は使い魔イクスに夜天 零の監視もとい搜索を命じていたが……

空「遅い……」

約束の場所、約束の時間になってもイクスは来なかった

空「むむむ…… 一体何処で油を売っているんだよ……」

少し不機嫌になり空を見上げる空

空「はあ〜」

空を見上げるのをやめ空は頭を下ろした

空「……………」

ふと目に入ったのはギルド『天の守護神』だった

空「嫌な予感がする……」

その時……………！

空「！？」

空は思わず立ち上がった感じたのは夜天 零の禍々しい魔力そして

それは凄まじいスピードで収縮していった

空「不味い！」

空は公園全体に無詠唱で闇と光を纏った防御魔法『アイギス』を使った

空が防御魔法を使った瞬間ギルド『天の守護神』の最上階の部分が黒く光った瞬間ありとあらゆるものが吹き飛んだ……

クライリ「ぐっ……」

ギルド『天の守護神』が合った場所は既にクレーターとかがしていた
その中でクライリは目を覚ました

クライリ「わっ……私は……」

あの禍々しい魔力に……

???「大丈夫でしょうか？」

クライリ「!？」

クライリの目の前には執事服を着た空の使い魔イクスがいた

イクス「意識はあるようですね喋れますか？」

クライリ「あっ……ああ……貴方は？」

イクス「イクスと申します……」

クライリ「助けて……くれたんですか？」

イクス「はい……無駄な殺生は嫌いなもので」

クライリ「……………」

イクス「さて……私は“アレ”を空様が来るまで止めないといきま
せんで下がっていてください」

クライリ「なっ!？」

イクス達の目の先には禍々しい魔力そのものを纏った“何か”が立
っていた

クライリ「あっ……あれは？」

イクス「ベルゼバブ・オルガ……この世にある全てを喰らい尽くす
化け物です……!」

???「クヒヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ!……!……!……?
????」

その姿は全体的に紫色になり龍のような形に変化していたそしてその腕には濁った緑で不気味に光る刃渡り1m位の長剣が握られていた

イクス「（“アレ”にはまず私は勝てませんね……さて空様が来るまで時間稼ぎと行きましょう……）」

イクスは徐に立ち上がると両手を顔の近くまで持っていていきお互いの手を交差に重ねた

イクス「……………さて、私と少し遊びましょう夜天 零……………！」

交差に重ねた腕を瞬時に降り下ろすとイクスは闇に包まれ本来の姿…………『邪神・イクス』へと変身した

クライリ「なっ!？」

クライリは再び驚いた先程まで執事服を着ていた青年が姿を変え魔獣のような姿に変化したのだ

イクス（邪）《ご安心下さい私は魔獣ではありません私は只の使い魔『邪神・イクス』です》

その姿は頭は前に尖った六角形に黄色く光る目があり口はなく、両肩から2本ずつ生えているの触手、両腕の鋭利な槍状の手甲で部分的に発光する胴体、背面の四枚の翼状の突起があったその姿は禍々しくも神々しかった

クライリ「心から…………直接声か？」

イクス（邪）《申し訳ありません私の真の姿は口が無く相手の心に直接話しかけることでしか会話が出来ません》

クライリ「分かった……」

イクス（邪）《これから激しい戦いが予想されます貴方はここを離れた方がよろしいかと……》

クライリ「私はまだ……戦《その状態で戦うのですか？》！」

クライリの状態は左手を喰われ魔力そこから出血し魔力もかなり消費していた……もう戦える状態ではなかった

クライリ「くっ……後は……頼みます」

口を咬み悔し涙を流しながらクライリは転移魔法で……

グサツ！

クライリ「えっ？」イクス（邪）《つつ！？》

いつの間にかクライリの胸から龍のような手が伸びていたその手の中には沢山の血管が繋がってトクントクン……とそれは動いていた

クライリ「……あっ」

グシャ

それは潰さたそれはまるで風船の中に水を入れ潰し風船から水が辺りに吹き出るように……血がクライリの心臓から血が吹き出た

オルガ
零「クヒヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！……！！！」

イクス（邪）《……夜天 零！》

オルガ
零「戦えない奴には興味は無い……さあ殺し合いと行こうか邪神？」

その頃……

アリサ「……………」

ユーリ「あ……ああ………」

空が大急いで張った防御魔法は碎け散っていた
その公園の中でアリサは放心状態ユーリは目を開き何が起きたのか
分からないでいた

二人の目の前にはまず吹き飛んだ民家それに潰された人々そして何かが原因なのか燃え盛る町の中で体が焼けながら叫びながら踊り死ぬ人々……みんな、みんな、皆、しんでいた、シンデイタ、死んでいた、……………

ユーリ「……はっ！……アリサ！おいアリサ！？」

アリサ「ふっ…ふえ！？」

ユーリ「逃げるぞ！」

アリサ「へっ……でっでも！」

燃え盛る炎は確実に此方の方に向かってきた

「……我が呼び声に答え吼えよ水龍！ありとあらゆる物を飲み込め！」

「……アクア・ドラゴニクス……！」

燃え盛る炎は突如現れた巨大な水の龍により一瞬で沈下された

「……更に……水を司る神よ！屍ありし大地に再び生命の恵みを与えたえこの大地に新たな生命の宴を！」

「……ルドナ・ウロボロス!!!!」

蒼天の空は直ぐ様灰色の雲に覆われ大粒の雨を降らした

空「よし……後は……」

空はとりあえずこの町の炎を消して直ぐ様イクス、零の方に飛んでいった

空「（イクス……無理するなよ……!）」

空が過ぎ去った後……

アリサ「……大丈夫ですか!？」

町人「だっ…大丈夫だ!ありがとう」

ユーリ「烈塵爆裂衝!」

ユーリは剣を振り回し木材等を吹き飛ばしその下敷きになった人を

助けていた

ユーリ「アリサ！此方の人も！」

アリサ「うん！……………月の神よその美しき月光において全ての人を癒す光となれ！」

—————ムーン・キュア！！！！」

優しい光が人々を包み人々の傷を次々と癒していた

アリサ「……………（何だろ？何だか零君の魔力を感じる……………けど凄気持ち悪い……………）」

ユーリ「アリサ、アリサ！大丈夫か！？」

アリサ「ユーリちゃん……………私行きたい」

ユーリ「……………アリサもか？」

アリサ「うん……………何か零君の魔力を感じる……………でも凄くそれが気持ち悪い……………」

ユーリ「……………私も行こう」

アリサ「えっ！？」

ユーリ「私もアリサー人では不安だからな付いていく」

アリサ「……………うん！」

アリサとユーリは零の魔力が感じられる方に走り出した……………それは運命か？それとも必然か？只運命と言うものは時には希望時には絶望を送るものとは……………この時の二人には分からなかった

イクス（邪）《はっ！》

オルガ
零「ククク……………」

ガキンツ！

バキンツ！

イクスは槍状の手甲で零を貫こうとするが零はそれを長剣で全て防いでいた

オルガ
零「中々やるじゃないか……………流石邪神様だな……………」

イクス（邪）《貴様と話すことは……………無い！》

ガキンッ！！

オルガ
零「つつ！」

イクスの重い一撃が零に打ち込まれ少し後方に後退りした

イクス（邪）《はああああああ！！！！》

イクスの肩から生えている四本の触手は半分に開き黒い魔力が集中していった

イクス（邪）《カオス・ブラスター！！！！》

四つの触手から闇の魔砲が撃たれそれは零に向かって凄まじいスピードで迫った

オルガ
零「……………フッ」

零は小さく笑い片手を小さく上げた

イクス（邪）《？何をする気だ？》

シュッ……

イクス（邪）《！？》

その片手を横に降った…… たったそれだけでイクスの攻撃を反射した…… 人々が逃げている方に

イクス（邪）《なっ？》

ドガアアアン！！！！

断末魔すら響かず人々は消しとんだ

^{オルガ}零「最高だろ？悲鳴すら叫べなく無様にその命を散らす…… 愚かな人間達」

イクス（邪）《……きっ…… 貴様……！》

イクスは怒りに我を忘れかけたが一度拳を握りしめ零を睨み付けた

^{オルガ}零「……クク……さあ……そろそろお前との殺し合いは飽きた……だから……」

モウ死ネ
♪

イクス(邪) ≪!?!≫

突如零の姿が消えその瞬間後ろから爆発的な殺気が現れた

イクス（邪）《くっ！》

イクスは本能的に左向き動いたが……

ブ
シ
ャ
:
:
:
:
:

イクス（邪）《っっ！！！！》

左向きにある触手や手などが全て斬られた

イクス（邪）《ぐっ……！》

左向きにある筈の物を全て斬られバランスを崩しイクスは倒れた

ザ
シ
ユ
…

イクス（邪）《~~~~~!!!》

倒れた直後顔を踏まれ腹の部分に零が持つ長剣が突き刺さった

オルカ
零「まさか最初の一撃で決まらなかったなんて……流石邪神と言った所か……」

グリグリ……………ブシャ！

イクス（邪）《……………！！！！！！……？……？……？……？……》

零はイクスの体に刺さったままの長剣を抉り出した

オルガ
零「口が無いのは不便だな……悲鳴が叫べないじゃないか」
ザシュザシュザシュ

イクス（邪）《ぐっ……………》

零はそう言い長剣を何度もイクスの体に刺し抜き刺し抜き刺し抜き
……………と繰り返した……………その顔は笑っていた

オルガ
零「……………本当に弱いな……………それで俺を殺すつもりだったのか？」

イクス（邪）《…………………………》

オルガ
零「ん？もう意識がとんだのか？」

イクス（邪）《だっ……………誰が……………》

オルガ
零「？」

イクス（邪）《誰が貴方を殺すと言いました？私は……………あの方が来るまでの……………》

只の時間稼ぎですよ」

——武装・千咲血舞！！！！

その瞬間数百本の剣の嵐が零を襲った

零^{オルガ}「！？……ちっ」

ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！
ガキンッ！ガキンッ！

零は長剣で嵐の用に飛んで来る剣を全て叩き下ろした

零^{オルガ}「遂に来たか……メインディッシュが」

空「零！！！！！！」

今ここに破壊神と完全な暴食者な舞台に立った……さあ、これで役者は揃った……後はどちらかが死ぬまでのデスマッチだけだ……

……

空「武装・天落襲舞！」

オルガ
零「上からか……」

空が手を降り降ろすと零の真上の空間が開き数百本の剣が一集まりになり降り注いだ

オルガ
零「……………フッ……………」

零は龍のような羽を広げ上から襲いかかる剣を防いだ

空「誰が終わりだと？」

オルガ
零「！？」

空「武装・終撃絶華ノ舞！！！！」

空は零の懷に潜り込み自分の周りに空間を開かせ剣を取り出し高速で斬ってその剣を捨てまた空間から剣を取り出して斬ると連続の剣劇の舞で零を斬り刻んだ

零^{オルガ}「速いね……けどこの程度では……！？」

空は再び空間から剣を取りだし数本投げた後自らも数本剣を握り零の体に何十本も刺し更に零の腹に回し蹴りを放ち空中を飛ばした瞬間……

零^{オルガ}「なっ！？」

零にいる全体の周り……360度には空間が開きそこから凄まじい量の剣がマシンガンの用に射出された

空「……武装・終華冥桜ノ舞」

零の体のありとあらゆる場所に剣が刺さるうとも針ネズミになろうとも剣は射たれそれは一本の木のような形になった……

空「砕ける……」

空はまた空間から一本の剣を取り出し投げた

バリッ……！！

剣が重なって出来た木は空が放った一本の剣によりバラバラに砕け散った……それはまるで桜の花が散るように……

空「……イクス大丈夫！？」

イクス（邪）《大丈夫……と言いたようですが……少々厳しいです》

空「分かった……これから聖奈の所に送るからそれまで頑張って！」

イクス（邪）《分かりました……ありがとうございます》

空「いいよ……俺の大切な執事だもん……」

イクス（邪）《……本当にありがとうございます》

空「後は任せて……『転移』」

空は地面に手を置くと魔法陣が展開されイクスは粒子となって消えた……イクスは最後に空にこう言った『美味しい紅茶を出してお待ちしています』……と

空「さて……立てよ……零」

オルガ
零「……ククク、お優しいご主人様だな……」

そこには無傷の零が立っていた

空「……そうだね……俺は甘ちゃんだよ……けどね“大切な物”の為に俺は俺と言う破壊神になってやるよ……！……神化……！！」

空は莫大な魔力と神力は解放し本来の姿……黒髪、黒眼の破壊神“
夜天 零”となった

零^{オルガ}「ククク……さあ来い破壊神！俺を殺してみろ！！！」

ぶつかる二人……その先には破壊、絶望？創造、希望？それは誰にも予想できない……何故なら片方は16もの全ての生物、全ての神を喰らった化け物……もう片方は神の中で全ての頂点に立つ世界神の一角破壊神……ぶつかる二人は踊る二人は殺し合う……それは定められた運命なのか？

第九話：決戦……殺戮者と破壊神……（後書き）

作者「終わったマジ……疲れた」

アリサ「お疲れさまです」

作者「今回は結構長めだったな……」

ユーリ「そうだな……何時もなら2……3ページで終わるんだが今回は7も書いたんだからな……」

零「フツ……」

作者「いや疲れたよマジで……それにしてもこの頃マジで暑い……何もやる気がしない……」

空「そうだのこの頃作者はいつも「暑……い……」とか言ってベッドに大の字で寝ているもんね」

作者「そうだよ！この頃暑すぎなんだよしかも蚊がプ……ンプ……ンクソうぜえ……」

アリサ「作者が黒くなっているよ……」

ユーリ「アリサ作者は元から黒いんだよ暑さで素が出てきているんだよ……」

作者「ま……とりあえず次回最終回……『未来への破壊……』お楽しみ……後次回でヒロインは死んでしまいます……ボソッ」

最終回：未来への破壊（前書き）

作者「遂に決着！勝つのは破壊神か！？殺戮者か！？ここまで見てくださって読者の方々本当にありがとうございます！

それでは相変わらずの駄文ですが……最終回『未来への破壊』！どうぞ……！」

最終回：未来への破壊

空「はあああああ！！！！」

オルガ
零「キヒヤヤヤヤヤヤ！！！！」

ガキンッ！！！！！！

二人がぶつかり合ったただけでそこにはクレーターが出来ていた

その二人……片方は龍の用な体をした化け物……もう片方は漆黒の神と漆黒の瞳をした神々しい少年……

空「螺旋神魔槍！！！！」

オルガ
零「終雷剣！！！！」

魔力による竜巻と黒き雷がぶつかる……そしてお互いは相殺し合った

空「くっ……」

オルガ
零「……クク……七龍連撃破！！！！」

空「っ！？」

零が剣を一降りすると七つの黒き龍が現れ空を食らわんと口を開け突っ込んできた

空「ちっ……エターナル……エクスカリバー！！！！」

空は瞬時に紫色の極光を放ち七つの龍の内五つの龍を相殺した

ドガアアアン！！！！！！

空「かはっ！？」

空は刀の鞘で防御するが二つの黒き龍には勝てず直撃し近くの建物に体を打ち付けた

空「ぐっ……」

零「^{オルガ}夜天 空……どうした？まだまだ俺は本気を出してないぞ？」

空「……そうかい……」

零「^{オルガ}世界神とやらも所詮このベルゼバブ・オルガには勝てないのか？」

空「ふざけんな……勝手に人の体を使いやがって……」

零「人の体？クク……確かに人の体だったなこの体は」

空「お前の勝手なエゴで一体どれ程の人がお前に喰らわれたのか……分かっていいのか！？」

零「^{オルガ}……ククク……ああ、分かっているよ……だが……この空腹間を満たすためには世界を喰らわなければ満たされないんだよ」

空「何が空腹間を満たすためだ！お前のやっていることは只の殺戮

だ！」

零「殺戮？ああそつだな俺の通り名は『鮮血の殺戮者』だからな」

空「俺は……貴様を許さない……」

零「ああ……いいぞ！その憎しみや怒りを俺にぶつけ俺を殺してみろ……！」

空「終焉の眼差し！ありとあらゆるを破壊しこの世にその姿を表せ……！」

———エンドレス・ロア……！」

空の後ろに巨大な目が開きそこから赤黒い極太のレーザーが放出された

零「ククク……霸王爆撃衝……！」

零は剣を地面に叩き付けると地面が大爆発し空の魔法を相殺した

空「！？」

零「夜天 空……今の俺は俺が喰ってきた16の世界と一体化している……俺を殺すつもりなら……16の世界を壊さなきゃ俺を傷つけることは無理だ」

空「……っ！」

空は零の言葉を聞かず零に突っ込んでいった

零^{オルガ}「ククク……天覇烈闇刃！！」

零の長剣から巨大な闇の斬撃が生み出されそれは空目掛けて飛んだ

空「神龍霸王斬！！！」

空が刀を降ると白き神々しい龍が辺りを飲み込みながら闇の斬撃にぶつかった

空「あああああああああ！！！！！！！！！」

バキンッ！！！！

白き龍は闇の斬撃を噛み砕きそのまま零に向けて口を開けて飲み込もうとした

零「この程度…暴龍炎獄破！！！」

零が剣を大降りに降ると空が放った白き龍より巨大な黒い龍が出現した

空「なっ！？」

零「喰らえ……暴龍！」

暴龍は白き龍を喰らい更に大きな口を開け空に襲い掛かった

空「ぐっ……!？」

巨大な黒き龍は空を辺りの大地と一緒に飲み込んだそして黒き龍が過ぎ去った後は大地は根こそぎ喰われていた

空「はあ、はあ、はあ……!」

空は刀を地に突き刺し何とか立ち上がっていたがその体は自らの血に染まっていた

零^{オルガ}「ククク……むっ？」

零ふとこちに近づいてくる人の気配を感じた

零^{オルガ}「……フッ……」

零は近づいてくる魔力がアリサとユーリだと知るとニヤリと口を尖らした

零^{オルガ}「……夜天 空……」

空「はあ、はあ、はあ、はあ……」

零^{オルガ}「返事無しか……まあ、いいお楽しみが来たな……」

アリサ & a m p ; ユーリ 視点

アリサ「はあ、はあ、はあ、……もうすぐだね」

ユーリ「ああ……」

もうすぐで零君が居る場所につく……けど……凄く気持ち悪いまるで私の体がこの先に行くことを拒絶しているみたい……

そう思っている間にも二人の距離は二人に近付いていった……そして……

ユーリ「なっ!？」

アリサ「えっ？」

二人の前には血だらけで刀を地面に刺して立っている空と異形の姿をした零が居た

ユーリ「零……なのか？」

零^{オルガ}「ああ……久しぶりだな……プレゼント、セラフィス……」

アリサ「……零……君……がやったの？」

零「……そうだとしたら？」

アリサ「っ！？」

……そんな……零君が罪の無い人々……殺したの？

ユーリ「零……お前自分が何をやったのか分かっているのか！？」

零「ああ……よく分かっているよ」

ユーリ「なら何でこんなことを！？」

零「それが俺の存在意義だからだ」

アリサ「どっ……どうゆうこと？」

零「そう言う意味だ俺と言う夜天 零と言う存在が何よりも俺は世界をも喰う存在……ベルゼバブ・オルガだからだ」

ユーリ「そんなエゴの為に……町の人々を殺したのか？」

零「正確には“喰った”と言う表現が正しいがな」

ユーリ「……私達は……お前に……好意を抱いていた……」

アリサ「うん……」

零「……」

ユーリ「けど……それは間違っていた……私達が見ていたのはお前の幻影だった……」

オルガ 零「それが……どうした？」

アリサ「私達はこんな状況でも零君のことが……好きなんだよ……だからお願い……もうこんなことは辞めて！」

それは悲痛の叫びでもあった……

アリサ & a m p ユーリ 視点終了

……

……

……

…

オルガ 零「くっあははは……」

もうこんなことを辞めて？……今まで俺がやってきた殺戮を辞めろ？

オルガ 零「無理だな……」

アリサ「えっ？」

零^{オルガ}「だって……そんなことをすることは……」

俺の存在意義を捨てるのと同じだ」

ブシャ……

その言葉と共にアリサは肩からを斜めに切り裂かれた

アリサ「あっ……」

まるで糸が切れた人形の用にアリサは倒れた

ユーリ「アリサ!？」

ユーリは直ぐ様アリサを抱えたが既にアリサの目には光が無かった

ユーリ「あっ……あっ……」

ユーリの目は徐々に絶望に染まりその瞳から滴が流れ落ちた

零はユーリを弾き飛ばし前屈みに構え……

オルガ
零「それじゃあ……死ね……」

シュツ……

風の音がユーリを過ぎた……その瞬間ユーリの体から血が吹き出したそれはまるで花が咲くようだった

オルガ
零「血咲喰満壊……散れ」

ユーリ「あっ……」

そんな言葉と共に血の花が散った……ユーリの体もそれを追いつきに……その体は散っていった

オルガ
零「……さて……夜天 空……そろそろ動けるだろう」

空「ふう〜」

オルガ
零「ん？いきなり溜め息とはどうした？」

空「ん？いや……堪忍袋の緒が切れたんだよ……」

シュツ……

バキンッ！！！

零^{オルガ}「!?!?!ガハッ!?!」

空は一瞬で零の懷に潜り込み腹に裏拳を叩き込んだ零はまったく受け身が取れないまま建物に激突した

零^{オルガ}「(バツ…バカな!?!この俺がまったく反応できなかった!?!)」

零は16の世界を喰らった人…零は喰らった者の能力と身体能力を奪うことが出来る…しかもそれを上書きしていることで更に力と能力を得ることが出来る…だがその神を越えた力と能力でさえも今の空に…付いていくことが出来なかった

零^{オルガ}「貴様…誰だ?」

思わず零は唱えた…目の前の先程まで地につけていた奴とは同一人物とは零は思えなかった

空「もう一度名乗ろう…」

その声は先程みたいな憎悪等は無くまるで絶対零度のような冷たい声だった

空「我が名は世界神の一角“破壊神”夜天 空…貴様には破壊神本来の力を見せてやろう」

ズズ…と空の真横から空間が開き剣の柄の部分がゆっくりと出てきた

空「これが世界神の破壊神の証…『デストロイア・フィケイション』…」

紅き六枚の翼

紅き地面に着くほどの髪

紅い太陽の用な瞳

紅く染まった天に昇る龍の様な絵が掘られた真紅の大剣

そして紅く血のように染まったコートを着た『破壊神』夜天 空が
存在していた

空（終極）「さあ……お前の鎮魂曲を奏でろ……！」

大剣を肩に乗せ中指、人差し指、零に差し空は呟いた

オルガ
零「キヒヤヤヤヤヤヤヤ！！！！！！！！！！」

零は笑いながら空に突っ込んでいった

空（終極）「……霸王星雷斬」

空が一度天に向けて大剣を縦に降ると天に魔法陣が展開され星が降
るような幾つもの雷が降ってきた

オルガ
零「しゃらくせええええ！！！！」

零は自分に向かってくる雷だけを叩き落としていった

オルガ
零「風烈死断閃！！！！」

零は巨大な鎌鼬を放ったそれは綺麗な軌道を描きながら空の身を切り
裂かんと突っ込んだいった……

空（終極）「……全霸天神衝」

空は自分の周囲に協力な衝撃波を起こし零の鎌鼬を相殺した

オルガ
零「やるな……」

空（終極）「今度は……俺の番だ……神威天滅牙！」

オルガ
零「なっ!？」

空が大剣を降ると巨大な斬撃が発生し辺りを巻き込みながら零に向かってきた

オルガ
零「ちっ!？」

ガギギギギッツ!!

零はその巨大な斬撃を自らの持つ長剣で防いだ

オルガ
零「ぐっああああ!!!!!!」

零は必死で巨大な斬撃を受け止めたが徐々に零は斬撃に飲み込まれていった……

オルガ
零「ゲグッ……アガア!？」

しかし斬撃は無情にも零を飲み込んだ

空（終極）「……………」

零「全テ壊ス、全テ殺ス、全テ壊ス、全テ殺ス、全テ壊ス、全テ殺
ス、全テ壊ス、全テ殺ス、全テ壊ス、全テ殺ス、全テ壊
ス、全テ殺ス、全テ壊ス、全テ殺ス、全テ壊ス、全テ殺
ス、全テ殺ス……………」!

「空（終極）……」

「零……暴食スル!!!」

その瞬間零からは全ての魔力を解放した解放された魔力は止まることを知らずこの世界……セレナーデを包んでいった

空（終極）「最後の……足掻きか」

零「全テヲ喰ラウ我ガ力ノ結晶！暴食ヨ今コソ世界ノ全テヲ喰ライ
オルガ
尽クセ

「――ワールド・オブ・ベルゼバブ!!!」

セレーナーデを包んだ零の邪悪な魔力は再び零の元へ戻りそれは巨大な口へと変わった

オルガ
零「全テヲ喰ラエ!!!!!!」

空（終極）「破壊神の証……開放」

ゴゴゴゴゴゴゴ！……！！

轟音が響くそれは破壊神の証から……大剣は徐々に開き出しそこから赤黒い粒子が溢れだした

空（終極）「これが……俺の……！」

そこで空は一度目を閉じもう一度開く……その瞳は何かの決意に溢れていた

空「全力全壊！！！」

赤黒い粒子は大剣を包み……大剣は何よりも紅く何よりも黒く染まった

零^{オルガ}「全テニ終焉ヲ！！！」

零の魔力により生み出された巨大な口はキングダム……否セレナーデを包む程の口を開け空を襲い掛かった

空（終極）「終焉破壊……神壊天覇創破斬！！！！！」

空が大剣を降ると100mは優にある超巨大な斬撃が生み出された更にそれは辺りの者を飲み込みながらレーザーの様に突き進みそれはまるでブラックホールのようなだった

零^{オルガ}「……ナツ……何！？」

斬！！！！

終極の斬撃は……ワールド・オブ・ベルゼバブを斬った

零^{オルガ}「……バツ……バカナ！？ソナバカナ！？『ワールド・オブ・ベルゼバブ』ガ！？」

空（終極）「さあ……お前の鎮魂曲を奏でろ！！！」

零^{オルガ}「！？」

『ワールド・オブ・ベルゼバブ』を斬られ混乱している隙に空は零の正面に捉えた

空（終極）「未来永劫！この刃は破壊なる世界へと誘う！！！」

破龍閻翼剣！

黒い龍の翼の様な漆黒の巨大な刃が形成され……

空（終極）「これで終わりだ！！夜天 零！！！！！！！」

零^{オルガ}「ガアアアアア！！！！！！！」

零を切り裂いた……

ドガガアアアアアアアンンン！！！！

.....

.....

.....

.....

...

空（終極）「やっと……終わった」

空の前には倒れた零が居た

空（終極）「さて……『暴食の魔眼』を破壊するか……」

空は手を零の顔にあて……自分の能力を発動した……空の能力は……破壊する力……その力は万物ですら破壊することが可能な……破壊神の力

空「……………」

パキンッ！！！

まるでガラスが割れるような音が零からした空が手をどけると……
零の瞳は赤色から蒼色になっていた。それと同じタイミングで零の
漆黒の髪は白い雪の様な綺麗な白銀色へと変わった

空（終極）「さて……と」

徐に空は大剣を空に掲げ目を瞑った

空「……………」

“破壊”するのは世界の記憶……夜天 零と言う存在がこの世界に
来た記憶……

空（終極）「……望むべきは……この世界の永遠の繁栄と永遠の存
在……」

まるで詩を言うように静かに目を開けた

空（終極）「……封印」

空の手から破壊神の証が消え空の髪は紅から黒、黒から金へと変わ
った

空「……よつと」

空は肩に零を掲げた……その時世界は変わりだした

辺りの崩壊した筈の建物は立ち直り死んだ筈の人間はゆつくりと立ち上がり何処かへ消えていった……もし零がこの世界へ来ていなかったらと言う可能性……それを空は創ったのだ

空「……歪め空間」

空が呟くと目の前の空間がネジ曲がりそこにはパツクリと空間が開いた

空「……さてと、帰りますか……」

空は夜天 零……いや『紫乃崎 紅』を抱えこの世界から消えた……これから紫乃崎 紅、夜天 空、イクスと……一体どんな物語が作られるのだろうか……それは……誰にも分からない……只あるのは……この世界は救われたと言うことは確かなことだろう……

さあ……これから三人は一体どんな物語を築くのだろう？
希望となる物語？、絶望となる物語？、虚無となる物語？、……世界がある程に可能性……ある

鮮血の殺戮者『完』

最終回：未来への破壊（後書き）

作者「終わりました〜」

空「これバットエンド……？」

作者「ん〜さあ？」

空「おいおい（汗）」

作者「とりあえずこれから新しいの作るぞ！」

空「それは？」

作者「世界神の楽園物語、世界神、超親バカ神アルゼント達がどんな騒ぎするコメディー……まあほんと最初はシリ阿斯があると思うけど殆どコメディーだよ！」

アリサ「私達の出番は……」

ユーリ「あるのか？」

作者「あるわけ無いじゃん」

アリサ&ユーリ「……………」

作者「えっ？あの……お二人方その手に持っている武器（と言つ名の凶器）をどうするんですか（大汗）」

アリサ「別に♪」

ユーリ「何でもないからちよつと此方でお・は・な・し・するだけだ♪」

作者「……空くんよこつ言つのを？」

空「死亡フラグ……骨は拾ってやるから頑張れ♪」

作者「ちよつと！？助け……ぎややややややああああ
ああああああああ……！！！！！！」

空「さて……骨と化した作者に変わって……ここまで読んでいただき本当にありがとうございます！！！！また新しい小説で頑張ってくださいと思います……それでは！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7460k/>

鮮血の殺戮者

2010年10月14日19時11分発行